

Viator

VOL.011

Happy Easter

復活についての黙想

イブ・ボアベール神父

キリストの復活について、またわたしたちの復活について、みなさんと共に黙想をしたいと思います。わたしたちは日々復活し、さらに毎日の暮らしの中でつねに復活しています。

ある晩のこと、私はしばらく眠りにつけなかったので、死後の復活の時にはどうなるのだろう、そして世の終わりにはどうなるのだろう、さらに今の暮らしの中で復活とは何だろうなどと深く思いをめぐらしていました。すると驚いたことに、イエスがそこに現れたのです。私はイエスを前にして語り、イエスも私に語りかけておられることに気づいたのです。静寂に包まれた時のことでした。空には星がちりばめられており、このような時を過ごすことは本当にすばらしいことでした。

イエスは私にたずねました。「私の復活を信じますか。そしてあなたの復活を信じますか。これはいつか実現するのです。」私は、ラザロの姉妹のマリアとマルタになって、ためらうことなく答えました。「はい、信じます」と。

すると、次の問いかけがありました。「復活は日々の暮らしの中でどのように実現すると思いますか」「イエスさま、あなたは私よりもよくご存じではないのですか。あなたこそが、私の内で、また他の人々の中で私に復活を体験させているのですから。特に、私がイエスさまへとまなざしを向け、イエスさまを凝視するとき復活を体験するのです。復活を信じるためには、イエスをじっと見つめなければなりません。」

私の黙想はこのように始まり、それは日本語で、それも見事な日本語で行われたのです。そこで私は起きあがって、イエスのおっしゃったことを書きとめなければならないと思いました。イエスは本当に話しかけられたのです。何と語りかけたのでしょうか。なぜ語りかけてくれたのでしょうか。これが第一の疑問でした。

その答えは、生命を信じることによる、というものでした。おそらくこのように 3 週間の間、入院生活を送ることによって、生命を信じるようになったのです。これまでもたびたび入院をしたのですが、入院をして回復期のたびに生命の恵みをいただき、神には深く感謝しています。

入院中に聖書を読むことは実にすばらしいことで、大切なことです。もし病院の患者さんに聖書を配り、聖書を読む時間がとれるようであれば、どれほどすばらしいことでしょうか。苦しみのさなかになっても復活を生きることはできるのです。

小教区で病気の方をお見舞いに行ったときのことで、その方はしばらく祈っていた後で、大きな声で「アレルヤ、アレルヤ、喜ぼう」と叫ばれたのです。しかし、この方の苦しみは大変に大きかったのです。

もう一度イエスに立ち戻りましょう。さらに何があるでしょうか。

イエスのもとには許しがあります。イエスの答えは許しでした。「あなたは兄弟に許しを与えるとき、復活を生きるのです。あなたが許しを与えるとき、あなたは復活するのです。」この言葉にまさる言葉はありません。イエスが復活されたのは、十字架上で与えられた許しによるものなのです。イエスはこのように振る舞うことで、完全に自由になったのです。自由のあるところ、生命は永遠に存在されます。私にはその証拠があります。というのも、私が許しを与えるたびに、イエスは働いておられるのです。

許しとは神の業です。私は神の業が自由に働くにまかせるのです。これが、2015年の四旬節に求められていることです。イエスが私たちの人生で働くようにしようではありませんか。許しには復活や生命の力があるから、許しが可能なのです。もし許しが無ければ、靈魂の内部に死が存在してしまうこととなります。私たちは告解の秘跡を通じて、再び生きることができるのであり、それによってこそ、復活を強く味わうことができるのです。また告解の秘跡を通じて、イエスは私たちとひとつになり、イエスは私たちを復活にあずからせるのです。この恵みをいただくためには、イエスを深く信頼することが必要です。そして信頼とは、謙遜によってこそ与えられるのです。

イエスは続けて語られました。

小教区で捧げられる日々のミサの中で平和が与えられます。司祭職を通じてイエスが平和を与えられるというのは、冗談でもなければ、喜劇でもありません。イエスは復活後に、弟子たちの集まりに現れたとき、本当に平和を弟子たちに与えられたのです。平和と復活は切り離すことができません。イエスから受け取り、他の人に与える平和が私たち一人一人の内部で本当に生きているのなら、復活を生きることになるのです。これは信じなければわかりません。というのも、イエスからやってくるものはみな生命と復活のしるしだからです。私たちの心のなかには大きな喜びがあらわれ、それは許しを与えるたびに大きくなるのです。これこそ、キリストの復活の恵みなのです。

イエスは続けて語られました。

次には喜びがあります。初代教会の頃に、キリスト者はとても大きな喜びをあらわしていました。そしてこの大いなる喜びのために多くの人々が洗礼を希望したのです。喜びと復活は切り離すことができません。私がどうすればよいのでしょうか。イエスは喜びであり、復活です。もし私たちがイエスを生きるのであれば、小教区はよみがえるでしょうし、生命にあふれたものになるでしょう。私たちは証人として、キリストのこの喜びを他の人々にも味わってもら

よう働きかけなければなりません。他の人々はこの喜びに飢え渴いているのですから。

最後にイエスは次のように続けました。

御聖体はキリストの復活を本当に味わわせてくれるもので、御聖体は復活の神秘の頂点です。イエスは御自身の復活を私たちに明らかにし、私たちに復活の生命に導き、私たちはいつの日か、復活の生命となるのです。復活祭は復活への希望を日常生活の中で体験させることを通じて、私たちの生命の一部となっています。2015年の四旬節は私たちにこの大切な出来事へと導くものです。私たちは、復活祭の準備をすることによって、キリストの復活を体験し、私たちがかくも愛される神への信仰をあらわし、私たちに与えられた生命を生きようではありませんか。十字架によって与えられた許しを生き、人としてのイエスから生み出される平和を生き、イエスの生命に触れることによって、私たちがつねに受け取っている喜びを生きようではありませんか。最後に申し上げたいのは次のことです。すべてはイエスからやってくるのです。ですからイエスに近づきましょう。そうすればイエスも私たちに近づかれる、と聖パウロは述べています。

桜が咲くのはイエスが復活したから

リノ・ベリーニ神父

イースターは、信者にとっても、表現しにくい、話しにくいところがあるんです。みんな復活が大切なこと、キリスト教の中心であると知っていたとしてもね。なぜでしょうか。言い換えれば、一体イースターは私たちににとって何か、復活祭は何を祝うか、イエスが復活したというのはどういうことか、イエスの復活は私たちににとって何か、など、いろんな質問が出てくる。

その難しさの理由の一つですが、私たちは、聖書を読むときに、気がつかないままに逆さまに読んでしまう。特にキリストを伝える福音書をハッピーエンドのストーリーとして読むんですね。イエスはこういうところに生まれて、30歳の時から布教が始まって、見事な行いをして、そして捕まえられて十字架にかけられ死んで、最後に復活した——これはハッピーエンドですね。イエスが世に現れて、布教して、最後にいろいろ災いを越えて勝った、という一般の単純なイメージがある。実はそこに大きな間違いがあるんです。なぜか。イエスの復活はハッピーエンドじゃなくて、まったく逆です。ハッピーな始まりです。エンドじゃなくて、最後じゃなくて、すべての始まりですね、復活は。

新約聖書全体もそうです。四つの福音書から、使徒行録、パウロの書簡と続く。こういうふうに聖書を読むとわかりにくいだけでなく、聖書が私たちに伝えたいメロディーがまったく逆さまになるんですね。ちょうど音楽をテープレコーダーに録音して逆さまに聴く時のようです。昔のテープレコーダーは逆さまでも聞けたですね。変な音ばかり、すばらしい音楽なのに雑音ばかり。私たちが聖書を読むときによくこういうふうにしてしまうんです。結果として聖書が私たちに一番伝えたいことがわかりにくくなるんですね。なぜでしょうか。新約聖書が生まれたのはイエスのストーリーを語るためじゃなくて、最後のイエスの復活のためでした。

弟子たちがイエス様といっしょにいたとき、いろいろな形でイエス様のすばらしい行いを見て、驚きから驚きへの3年間でした。大勢の人たちの前で奇跡を行うのを見て、彼らがイエスに憧れを感じていたのは当然ですね、自分の家族を離れるほどにね。不思議なことに、このような憧れがあったにもかかわらず、彼らはイエスの言葉を記録する必要を一つも感じなかったんです。結局私たちがイエスについてこんにち知るための泉になるところを彼らはその段階で書き記す要求を一切感じなかったわけです。

そして新約聖書の中に細かく書いてあるように、イエスが最後にたいへんな目にあつたそのとき、十字架につけられたとき、彼らは悲しくてたまらない、絶望に陥るところだったんですね。悲しげな様子で前の生活に戻って行った。で、「どういうことがあったか」と彼らについてきた旅人が聞くと、「あなただけが知らないんですか。彼は言葉の上でも行いの上でもすばらしいことを行ったんですけど、もう殺された。もう終わり」。結局、彼のすばらしい言葉は言葉にすぎない、ということだったんですね。「私たちは彼に希望をおいていたんですけども、もう死んで三日目になっているから、もう終わりです」。それまで彼らがイエスについて憧れを感じていても、驚きを感じていても、もしそこですべてが終わったとしたら、イエスは過去の中の人、知恵人の中の偉い人とか、すばらしい夢のある人とか、平和を宣言した人ですけど、それ以上に残らなかったんですね。でも、その瞬間に何か起こったんです。

教会は、そして信者である私たち一人一人は二千年前からその瞬間を調べているんです。それは教会そのものと深い関係があり、私たち一人一人と深い関係がある瞬間です。新約聖書の全体はその瞬間に何があったかを伝えるための努力です。その瞬間に、イエスの弟子たちがみんな変わったからです。それまでは人が怖くて閉じこもっていたのに、外に出て、勇気を出して、喜んで命を捧げるほど、それぞれ変わったんですね。「聖なる夜」(復活讃歌)、この暗闇の中に何かあったんです。そこから彼らは、この人が誰だったかを知りたくてたまらなくなりました。一生懸命思い出して、そしてそれだけじゃなくて、彼らがその瞬間に感じた、体験した、心だけじゃなくて体でも経験したことを表現するために新約聖書のすべてが生まれたんです。彼らは何か言いたくてたまらなかつたんです、伝えなかつたんです。

こんにち新約聖書を読むとき、その表現の一番最初の段階を調べることができるんですね。それは「イエスが復活しました」という叫び、ペトロの叫びです。まだパウロの説明がないころ、四つの福音書が書かれる前、説明する、裏付けるための神学が生まれる前です。裁判のときに、経験したことを表現するための言葉です。次の段階はこれを人に伝えるための表現です。彼らは黙っていられなかつたんですね。だから、人に伝えるために道具を作らなければならなかつた。旧約聖書の言葉、その預言など借りてね。そこからどんどん教義が出て来た。すべてがそこから始まったわけですね。

彼らは何を言っているのか。この人は十字架で本当に死んでいた、私たちはこの人が死んでいるのを見た、この人の苦しみなど経験した、血が流れるのを見た、でも、三日の後にこの人が生きてると私たちはわかった、と。

結局、復活とは、二つのことです。まず第一に、イエスについてのこと。イエスが神と特別な、

ユニークな関係をもっていること。彼らが使う言葉で言うと、主であること。これは神秘ですね。私たちが言葉で言い表すことができない神秘です。そして第二に、それはイエスについてのことだけじゃなくて、自分と深い関係のあることです。イエスが主であるからこそ、イエスが話した言葉が真実であり、彼自身が神の言葉であり、その言葉に命をかけるべき、などですね。この人が生きて、そばにいる。

イエスが主として生きていることを自覚した人たちのさまざまな物語、ラブストーリーをまとめたもの——それが新約聖書です。女性とか弟子たちとかヨハネとかペトロとか、個人的な形またはグループの時とか、パンとぶどう酒を分かちあうときに経験したこととかね。さまざまな形でイエスについて悟り、イエスが主であることを経験した、そしてその美しさに恋に落ちたといってもいい、その経験です。私たちがこんにち、洗礼を受ける前、そして毎日、この人たちの書き残した経験を思い出しながら、同じ経験ができる。伝統の中で人から人へ便りが手渡されて、イエスが生きていること、そしてこのイエスが誰だったかを私たちは経験できるんですね。教会はこのようなことを経験した人たちの家族です。

イエスが主と定められたのはそのときになってはじめてじゃなくて、イエスは世のはじめの前から、永遠から、神と本来的な関係にある者です。本物の子です。父なる神の御子、そう彼らは表現するんです。そして、それだけじゃなくて、ずっと未来の方向にもあるんですね、このイエスの主であることは。いずれこの人が私たちを迎えに来るんです。最後に、苦しみを知っているこの人の憐れみによって、私たちが審判される。そしてよく私たちが忘れる、陰府（よみ）の国に戻ったイエスね。陰府の国というと祖先の世界かな。結局、イエスの救い、イエスが私たちに与えてくださった癒しは、私たちだけに働くのじゃなくて、私たちのルーツを治すんです。これを彼らは大きな光と表現するんですね。大きな光を見た。光は意味ですね。イエスが復活したなら、私たちの苦しみに意味がある。この人の道を歩けば、神に出会う、神の子供になることができる。この人の言葉を信じて生活すれば永遠の空しさに陥ることなく、満たされる。彼の言葉に絶対的な意味がある。最初の表現で言えば、復活はイエスのハッピーエンドでなく、そこからすべてが、命が出てくるんです。春のようにすべてを新しくする命が。

私たちがよく言うのは、イエスが復活するのは桜が咲く頃、春の時だと。というと、春があって、その頃にたまたまイースターがあたるということですね。でも、よく考えると、そうではない。春があるのはイエスが復活したから。桜もそうです。

復活祭にあたって

エルマン・バム二師

日本在住の聖ヴィアートル会会員、準会員、そして美しく、すばらしい北白川教会に集う親愛なる兄弟姉妹のみなさんに、ご挨拶を申し上げたいと思います。みなさんは小教区の頭であるボアベール師と手を取りたずさえて、共同体を作り上げてきました。この共同体は生き生き

としたものであり、団結し、お互いに、また主の畑に結びついています。ヴィアートル会のカリスマはここ日本でも本当に生きています。これはヴィアートル会の創設者ルイ・ケルブ神父が望んだこと、すなわち「生き生きとした信仰を持ち、それを深め、讃える共同体を作り出すこと」ではないでしょうか。ケルブ神父のカリスマにより、その没後2世紀を経ても、世界各地で福音宣教のためのすばらしい営みが続けられています。みなさんは、ヴィアートル会の終わりなき活動に積極的に参加しているのです。

北白川教会のみなさんには来日後ただちに、感謝の言葉を申し上げず、失礼しました。みなさんは、来日した私をただちに受け入れて下さり、お仲間に加えていただきました。この教会の家族は今や私の家族となり、私がこの小教区の子どもとなることができましたこと、たいへんに喜んでおります。私を温かくお受け入れ下さいましたこと、みなさんの温かいお気持ちに感謝申し上げます。どうか、神が絶えずこの家族の数を増やし、また聖なるものとして下さいますように。

皆様の間でこの教会のお仲間としていただくため、自己紹介をしたいと思います。私はエルマン・バムニと申します。西アフリカにあるブルキナ・ファソの出身で、この国は 27、4 万キロ平米（日本の国土のおよそ3分の2の大きさ）で、1700万人（日本の人口の7分の1）が国内に住み、1000万人が国外に暮らしています。私はブルキナ・ファソ国籍ですが、父親が隣国のコートジボワールで働いていたために、隣国で生まれました。

私は 2001 年 1 月 21 日に聖ヴィアートル会を知りました。ヴィアートル会士は 1999 年 10 月に会の設立のためにブルキナ・ファソにやってきたのです。私は修道士から学びを始め、彼らをよく知るようになり、修道会に入会したいとの気持ちに答える選択を行ったのです。4 年間の学びを終えて、この修道会の主なる使命とは、現代社会の中であって、若者や孤児の教育に関わることで、このカリスマは私の希望に答えるとわかりました。そして 2005 年 10 月 2 日に首都のワガドゥゲーで志願を認められました。志願期とは修道生活の入門期であり、また共同体をよく知るための期間でもあります。2006 年 10 月 21 日にはコートジボワールで修練期が認められました。修練期という修道生活をよく知るための期間は半年間続き、その終わりの 2008 年 7 月 12 日にワガドゥゲーで聖ヴィアートル修道会の修道者として初誓願を立てました。その後、2008 年から 2011 年までの 3 年間、コートジボワールの首都アビジャンで教育学の勉強を行いました。

学校での研修の最後にあたり、2011 年から 2014 年までワガドゥゲーの聖ヴィアートル会学校で主任教師として働きました。若者のいる学校で働いたことは豊かな経験となりました。公教育での場での教育活動に加えて、多くのカトリックのグループなどで活動を行い、これもまた多くの経験をもたらしてくれました。いかにわずかなものであれ、このような経験を日本という、私にとっての新たな宣教の地のために役立てたいと思っています。もちろん、みなさまからのさまざまな貴重な経験についても喜んで受け入れたいと思っています。

私は、日本への宣教の使命を新たに受け、その呼びかけに喜んで答えました。この呼びかけに答えるにはいささかの時間を要しましたが、熟慮の結果、2014 年 12 月 24 日からみなさんの

お仲間となることができました。

この日から私にとっての新たな人生が始まり、多くの課題があります。日本語やいくつかの食習慣や文化などにチャレンジしなければなりません。しかしみなさんのおかげで私はこの環境に慣れつつあり、神に感謝しています。というのも、神はいつもわたしたちの前を歩まれるからです。私は現在、日本語の授業を受けており、みなさんとうまくお話ができるようになりたいと思っています。まだ日本語がよくわからないために、多少の距離があるようですが、みなさんのことはとても大切に思っていますし、子どもや若者、年配の方々みなさんにも好意を持っています。

私は、主の働かれる畑で先導された修道会の兄弟のみなさまに深く感謝したいと思います。ここには多くの乗り越えなければならない課題もあります。高齢になってきているにもかかわらず、先輩方はこれまでと同じように、働き続けています。私は日本に適応するにあたり、先輩たちの長年にわたる勇気に励まされていますし、それは学びになると信じています。

京都に暮らしてこの3ヶ月の間、先輩方は私を仲間として受け入れて下さいました。神が先輩方に長寿をお与え下さるよう、祈りたいと思います。ブラザー・マルセル、ボアベール師、ブラザー・ベルナルド、ラバディ師、ブラザー・イグナチオ、ブラザー・セルジュには私を支え、また支え続けて下さることに感謝したいと思います。神がわたしたちの兄弟愛を強め、地上での立派な暮らしを通じて、天の父なる神へ向けて人々の靈魂を獲得することができますように。

小文を終えるにあたり、小教区のみなさんに復活祭のお祝いの言葉を申し上げたいと思います。キリストは復活した、アレルヤ、この世の権力や暴力への不安に打ち勝つよう、わたしたちは招かれているのです。復活節にあたり、復活されたキリストが皆様ひとりひとりの心に、皆様の周りの人々に平和をもたらし、家庭に愛をもたらしめますように。復活されたキリストが病を取り除き、御国を告げ知らせるため、勇気の盾をお与え下さいますように。もう一度みなさんに感謝の気持ちを伝えたいと思います。わたしたちが一致して、平和と愛を生きることができますように。

「この世のものはすべて過ぎ去るが、神のみは過ぎ去ることがない。」

受洗のめぐみを頂いて

イエス様のご降誕の日に、皆様に見守っていただき、父と共に受洗礼させていただきましたこと、感謝いたしております。ボアヴェール神父様を通して、神様が呼びかけて下さったのだと感じております。今は毎日神様に見守られ、大いなるお恵みの中で生かされていることを、理解できるようになりました。

父もおかげ様で、平穏な日々を送っております。これからも、学びを重ねて参りたいと存じます。教会家族の一員となりました私たちを、皆様、どうぞお導きくださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

ヨゼフ K.M

シェナのカタリナ Y.I

歌は人生を輝かす

B.S

実を言うと、私のマレーシアでの生活を語って欲しいと言われたとき、私は数秒間ぼうっとしてしまいました。ずっとマレーシアに住んでいましたので、まるで呼吸をしているように周りのことに(マレーシアのことが)気づかなくなっていました。私たちマレーシア人にとっては、「マレーシア」から食べ物のイメージばかり浮かんでくるのです。ところが、しばらく考えてみるとなぜ私が今までカトリック教徒として生活を続けようとしているのかは、やはりマレーシアの生活がきっかけでした。

私はマレーシアとインドネシアが共有する島であるボルネオ島のサバ州に生まれました。カトリックの家庭に生まれたので、生まれて一か月後に洗礼を受けました。子供の頃から、毎週土曜日と日曜日には家族と一緒に教会に行っていました。私の家族がいつも行く教会はセークレッドハート教会と呼ばれており、丘の上に建てられたシンプルな建物です。

小学生のときは、日曜学校のために朝早く起きるのを辛く思いながら教会に行っていましたが、11歳のとき初めて教会がとても楽しいところだと思えるようになりました。ある土曜日、ミサが始まる前に友人から聖歌隊への誘いがありました。家族は教会での仕事で忙しく、ほとんどいつも一人で座ったので、もしかするとかわいそうに見えたのかもしれませんが、



おかげで聖歌によってより信仰を深めることができました。多民族国家のマレーシアは複数の言語に接しながら、生活します。教会でも、聖歌は私の母語であるカダザンデゥスン語以外にもマレー語や英語でも歌われています。私は無口なので、相手との会話にはあまり自信がありません。歌もそれほど上手ではありませんので一人で歌わせられると、すぐに照れてしまいます。教会の皆さんと心をつにし、同じ目的を持って同じ歌を歌うのはなんと素敵なことだろうと思いました。ミサ後には、また自分の仕事や用事に戻らねばなりません。教会ではいつも自分の居場所があると感じました。聖歌隊の皆さんは一人一人背景が異なりますし、同僚であったり同じ学校に通っていても仕事で忙しくクラスも違うので、なんとなく違和感を覚えても仕方ありません。けれども、歌うときはその壁を感じず、純粋な友達に見えてきます。徐々に、聖歌隊の皆さんや教会の皆さんだけではなく、どんな人であっても最初から友達であると思うようになりました。

ところで、参加してから毎年特に楽しみにしているイベントはクリスマス前のキャロルズバイキャンドルライトです。町のいたるところから若者がやって来て、各団体が順番にクリスマスの歌でイエズス様の御生誕を語ります。団体によるコスチュームも魅力的で、夜空の下

で蠟燭を持ちながら歌って、まるで星空が声を持って歌っているかのようです。

京都市に住み始めてからすでに一年間が経ちました。確かに時には故郷のことを懐かしく思うこともあります。毎週皆さんと一緒にミサを祝ったり、歌ったり、またいつも新しい人に出会えることで日本にいても故郷の暖かさを感じます。京都に来たこと、皆さんとの出会いは祝福と感じております。

2015年度 洛北ブロック活動計画

<ブロック長期計画>

- ①キリストを中心とした祈りの共同体を目指します。
- ②信徒、特に若者・壮年層の生涯養成、奉仕職の養成、青少年の信仰養成と信仰の継承に取り組めます。
- ③共同宣教司牧を通して、信徒、修道者、司祭との交わりを深め、協働します。
- ④地域社会と連帯し、それぞれの生活の場でキリストの証人となり福音宣教に努めます。

<2015年ブロック短期計画>

- ①主における交わりとブロックの交流を深めるために、ブロック聖体大会、ブロック巡礼を企画します。
- ②小教区の枠組みを超えて参加可能な信仰入門講座、聖書通読講座、典礼研修会、分かち合い、黙想会などを開催します。
- ③ブロックで協力して、夏期教会学校、親子新年会、初聖体・堅信準備クラス、中高生会を企画・開催し、青少年の信仰教育に取り組めます。
- ④各小教区の情報公開し、共有し、企画からブロックとして協力できることを検討していきます。
- ⑤地域社会と連帯し、東日本大震災の被災地と連帯するためのバザー、コンサート、祈りの集いを開催します。

<行事予定>

☆ブロック巡礼

溝部司教様とともに福知山教会新聖堂を訪ねる旅

6月20日(土)

☆ブロック聖体大会

9月23日(水・祝)

於:西陣教会

詳細は追ってお知らせいたします。どちらもふるってご参加くださいませ。

カトリック北白川教会 信者総会議事録

日 時：2015年3月8日（日）11：00～12：20

場 所：カトリック北白川教会ホール

出席者：Fr. ボアベール、Fr. ベリーニ、Br. ベルナルド、イグナシオ管区長、

役 員：荒巻、梅木、古曾志、高瀬、山口、 信 者：41名

司 会：高瀬

書 記：荒巻

議事

開会の祈り Fr. ボアベール

1. あいさつ 高瀬和彦

新役員と昨年度の役員の紹介

2. 資料の確認（高瀬）

3. 報告事項

（1）2014年活動報告・・・資料①

全体（高瀬）・典礼部（高瀬代読）・教育部（森田）・教会行事支援部（大喜多）

施設管理部（西平勝代読）・財務部（西平ひ）・広報部（細川）、資料に基づいて報告を行った。

・質疑はなし。資料の訂正；活動報告 役員3）Fr. ボアベール叙階50周年⇒40周年

（2）2014年会計報告・・・資料②収支決算書（その1）、（その2）

資料②に基づいて財務部（西平ひ）が収支決算報告をした。

続いて、会計監査（イグナシオ地区長、杉本）が、適正に会計処理されていることを報告した。

4. 協議事項

（1）2015年活動方針・・・資料③

全体（古曾志）・典礼部（代読；高瀬）・教育部（栗野）・教会行事支援部（大喜多）

施設管理部（代読；西平勝）・財務部（西平ひ）・広報部（細川）が、資料に基づいて方針を説明した。

質疑はなし。

・イグナシオ管区長；Br. セルジュの呼名について。氏名は「バチオノ・ウィリアム・セルジュ」、これまで「Br. セルジュ」と呼名してきたが、本人の希望により、洛星中高ではウィリアムと呼名することになった。北白川でも統一して「ウィリアム神父様」と呼名をお願いします。（イグナシオ管区長）

（2）組織紹介・・・資料④

2015年カトリック聖ヴィアートル北白川教会 小教区組織・役割表（案）に基づいて高瀬が説明した。

質疑

・大喜多:教会行事支援部の中に、青年の集い・女性グループ・男性グループという欄があるが、このグループ活動についての役員の考えはどうか。

⇒(高瀬) 今年から始まった新しい提案・活動であり、活動を支えていきたい。男性の集いは土曜日の夜に定期的に始まっているが、女性の集いという提案から、新年会に発展したように、青年・男性・女性という枠にこだわらず、フレキシブルに活動できるよう支えていく考えである。

(3) 2015 年度会計予算・・・資料⑤

予算その1に基づいて、財務部(西平ひ)が説明した。教区納付金Bは昨年より126,000円減額になった。

4. その他 自由討議

・西平勝;施設管理部は、大島・梅木さんが主に植木の手入れをしている。施設管理部に梅木さんの名前を入れることを依頼する。

・瀧川;掃除当番表に裏面がなく、掃除場所がわからないが、どうするか。

⇒何らかの形で、掃除担当者に配布できるようにする。

・楠本;総会の中では、意見が出にくいのが、うまく意見を引き出せる方法がある。

食事・アルコールを交えての会は、緊張が緩み自由に意見を出しやすいので、企画してほしい。(会場から拍手)

⇒高瀬;男性の会は、下地さんが企画し、土曜日の夜であり、アルコールが出る可能性がある。

・西平勝;男性の会は出席者が少なく、気軽に出て頂きたい。勉強会など堅苦しい集いではなく、教会のことなら何でも語ろうという会で、若い人の出席も希望している。

・栗野;教育部は、これまで座学中心だったが、外に出て楽しむことも企画することになった。教会の大人と子供の接点を作れたらという意見も、出ている。ガーデンパーティの準備などに、子供も関われば良いなという意見が出た。

⇒西平勝;子供が参加すると活性化する。防災訓練など子供を主催にしていることも多いので、賛成である。

・細川;広報部は人募集が全てである。教会員のつながりを意識して、HPの内容の充実を図っている。関心がある方は、簡単なことからお願いしていくので、是非協力していただきたい。

・西平勝;日曜日9時5分前(8:55)から、ロザリオの祈りをしている。ミサの前に唱えることはFr. ナドウの意向でもある。先唱者、子供がロザリオを覚えることの意義から、子供と共に参加することをお願いしたい。

・Fr. ボアベール;典礼部のDVD視聴のために、本多さんからDVDを寄贈された。

平日に、自由に教会に来てほしい。さまざまな会の活動だけでなく、祈る教会、祈りの雰囲気がある教会であることも大事である。最近、祈りのために教会に来る人の数が少ないと感じている。ロザリオ会・四旬節十字架の道行など、以前と比較すると段々減少しており、

少し、悲しい。司祭・修道者と信者1名という日も多い。祈る人、祈る仲間が必要ではないか。愛と祈りは切り離すことができない。愛すると相手のために祈る。個人的に来たり、掃除で来た時などに、2～3分ほどでよい、聖体の前で祈ることが必要ではないか。

HPについて、写真が少ないと思う。子供・若い人の写真はあまりなく、老人ばかりとを感じる。後ろ姿であっても、若い者の集っている姿があるとよい。北白川教会は、子供達の洗礼が多く、その子供達が侍者を務めるなど、恵まれている。若い人はHPを見るので、若い人へのPRとして、写真を多く入れてはどうか。

教区から、外国籍の方が、結婚式の間として紹介されるようになった。結婚式係・葬儀係があるが、コーラス者が少なく、寂しい。もっと開かれたものにできないか。葬儀は、遺族の意向があるが、特になければ、できるだけ信徒に連絡できないか。

eメールアドレスの連絡があれば、主日の典礼・教皇文書など送信するので、知らせてほしい。

閉会の祈り Fr. ボアベール

編集後記

今回、初めて原稿集めと編集作業に携わることになりました。とにかくわからないことばかりで、「こんなやり方でいいのか？」とおっかなびっくりしながらも、何とかこうやって形になりました。

また、今回はいつになく寄稿が充実したため、増ページということになりました。この場を借りて御礼を申し上げます。これからも皆様のご協力により、より充実した紙面作りに取り組んでいきたいと思っております。よろしくお願いいたします。(文責：広報部柴田)

